

放射線健康リスク科学教育における動画コンテンツの応用とその教育効果

Teaching effectiveness of video contents in education of radiation health risk sciences

松田尚樹、西弘大、工藤崇、浦田芳重

長崎大学原爆後障害医療研究所、医学部先端医育センター

2017年3月に文部科学省から公表された医学教育モデル・コア・カリキュラム（平成28年度改訂版）では、「生体と放射線」、「医療放射線と生体影響」、「放射線リスクコミュニケーション」及び「放射線災害医療」の4つの学修項目より構成されるE-6)「放射線の生体影響と放射線障害」が新たに設定された。このカリキュラムを具現化する方策の一つとして、長崎大学、広島大学及び福島県立医科大学が連携した課題解決型高度医療人材養成プログラム「放射線健康リスク科学人材養成プログラム」では、各大学の担当教員の連携のもとに、放射線災害を経験した3大学の特色を生かした講義、実習を試行錯誤の中で編成してきた。

長崎大学においては、2016年度より医学部医学科基礎科目「環境因子系」の再編を開始し、2019年度からは科目名も「放射線基礎医学」に改め、モデル・コア・カリキュラムに準拠した、物理学→生物学→医療応用→規制科学→放射線災害医療→放射線リスクコミュニケーション、の流れによる講義カリキュラム（60分×15コマ）、及び放射線の計測、生物影響の定量化、健康リスク評価、E-ラーニングによる実習（60分×12コマ）を整備した。E-ラーニングには「放射線健康リスク科学人材養成プログラム」で制作した放射線リスクコミュニケーション及び放射線災害医療に関する全国配信中のビデオコンテンツ4本を、また健康リスク評価にはホールボディカウンタのビデオコンテンツを長崎大学大学教育イノベーションセンターの協力を得て制作し使用した。このうちEラーニングは長崎大学主体的学習促進システム（LACS: Learning Assessment & Communication System）上で学生の視聴学習を管理し、視聴後に理解度を判定するための小テストを含むフィードバックを行った。

本発表では、制作した動画コンテンツの内容、全国配信回数、理解度判定の結果、及び他の対面講義との比較と今後の課題について報告する。